

最初にイエスの弟子となった二人は、洗礼者ヨハネの弟子でした。洗礼者ヨハネがイエスを見て、「見よ、神の小羊だ。」と言ったのを聞いて、一緒にいた二人の弟子がイエスに従います。イエスは彼らの「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」という問いに対して「何を求めているのか」と答えます。この答えは単に滞在先を尋ねているだけでなく、「あなたは一体どういう方か。神さまとどのような関係にあるのか」という問いでもあります。「イエスは誰であるか」、「イエスがどこから来てどこへ行くのか」、を知ることがこの福音書の神学的主題の一つなのです。イエスは、「来なさい。そうれば分かる」と答えます。この言葉には弟子として従って行けば、父の懐の中に留まっているイエスの本質が分かるようになる、という著者のメッセージが込められていると思われます。著者はこの福音書で「留まる」という動詞を繰り返して用いて、イエスが「留まっているところ」を「見て」、イエスと「一緒に留まった」と記すのは、ヨハネ共同体の自分たちが今イエスを見ており、イエスと共に留まっていることを象徴的に表現したと考えられます。イエスに従ったアンデレは兄弟シモンをイエスの元に連れて行きました。洗礼者ヨハネとアンデレの姿に、宣教のモデルが描かれています。この二人がしたことは、まず、イエスを証言したことです。洗礼者ヨハネはイエスを指さして弟子たちに「見よ、神の小羊だ」と言い、アンデレはシモンに対して「私たちはメシアに出会った」と言いました。これはそれぞれの信仰告白です。次に、この二人は自分の非常に身近な人をイエスに引き合わせました。更に、フィリポとナタナエルの召命物語が記されています。私たちもイエスによって全てを知られ、そのうえでイエスは私たちを愛し、受け入れ、我が子よ、と呼んでいます。この福音書の弟子の召命記事は共観福音書の記事に比べると召命の間接性に特徴があります。直接イエスにより弟子とされるのはフィリポだけで、他の四人の弟子は全て誰かの仲介によってイエスの弟子となっています。著者の記述は史実を記そうとしているわけではありません。イエスの死から約60年以上も後の時代に生きている著者やその共同体の信徒たちはイエスに直接召命されて弟子となったのではなく、何世代かのキリスト教宣教者たちの宣教に仲介されて、信徒となった人たちです。そこで著者は自分たちの召命の間接性を、このような記事として表現したのだと思われます。実際に生前のイエスに従った弟子たちも、そして一世紀末のヨハネ共同体の信徒も、「人の子」イエスに従っているのです。